

「古典学の功績 インド学の場合」

高崎 直道

評価委員・鶴見大学 学長

ここに古典学とは近代において発達した、世界の諸文明、文化伝統の古典に関する研究の総称として用いられている名称であって、それぞれの文明に固有の伝統的古典研究（たとえばキリスト教会内の聖書解釈学とかインドのパラモン教学など）ではない、いわゆる近代古典学をさす。この古典学は方法論的には文献学を主とし、また一般的にいうとヨーロッパ人の手によって始められ、その古典たる古代ギリシャ・ローマ文献の研究を範として、自らの「発見」した諸文明の古典の解読を通じてその文明を理解することを目的として作りあげられた学問である。

この近代の古典学はまた、多くの場合、各文明固有の伝統的古典研究とは異なって、その文化伝統の外側にある人々による客観的研究という姿勢が取られる。例外はヨーロッパ人にとってその文化伝統の淵源とみなされるギリシャ・ローマの古典研究たる西洋古典学であるが、しかし、それとても、キリスト教の伝統の中にあって、それとは異なる（キリスト教伝播以前の）ヨーロッパ文化の淵源としてルネサンス期に発見されたものであり、古代以来の伝統がそのまま発展したものではない。むしろその伝統がイスラームによって横取りされていたのを、自らの手にとり戻そうとして始められたものと言える。そもそも西洋古典学を発達させたのは、当のギリシャ人の直系の子孫ではなく、その古典ギリシャの人々によってバルバロイとよばれたであろう人々の子孫たちである。

一方、西洋古典学以外の領域については、ヨーロッパ人の認識の広まりに応じて、未知の世界への憧れとともに始まったものであるが、それが学問体系として確立したのは18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパの近代科学の確立に伴うもの、また、それぞれの領域における古典学の発展の度合いは、その地域への関心

の強さに比例し、関心の強さは往々にして植民地化と比例している。そこにヨーロッパ優位の差別観の入りこむ余地があったことは否定できない（たとえば近年オリエンタリズムの名で批判されているような）が、かれらが学問体系としての客観性の保持に努めたことも認めなければなるまい。このヨーロッパ人による古典学の創始という点の例外として、われわれ日本人による日本研究がある。もちろんその成立には明治期におけるヨーロッパの近代的学問制度と方法論の輸入が前提となっているが、自らの手で古典の近代的研究体制を開拓したことは他に例をみない。インド学の場合、インド人の参加とその貢献の度合いは著しいが、学問体系の開拓という点では全くヨーロッパ人に負っている。

さらに、近代の古典学が伝統の外側にあるものの中に成り、かつ客観的であることを標榜するいみのことを述べたが、その利点は、この百年の間に日本人学者が西洋古典学を含めて殆どの領域に参加し、それなりの貢献を果たしていることにも見られる。一方、客観的方法に関しては、諸方面で、果たしてそれで伝統文化の深い理解が得られるかという批判的見解も出されているが、全面的に否定されるべきものでは勿論ない。なお、それぞれの伝統に所属する人々による古典学への参加という点では、20世紀の後半、第二次世界大戦後の植民地解放の結果、著しく状況が変化し、活発となっている。それによる各地の古典学のさらなる発展が大いに期待されるところである。

以上、この2世紀にわたる近代の古典学の特色と意義を一般的に眺めてみたが、以下、それを筆者の専門領域が所属するインド学について、もうすこし詳しく見てみよう。

インド学の場合

インド学 Indology も勝れて古典学であり古典文献学であると言ってよいであろう。ただ現代の状況からいうと、インドという地域に起こり栄えた文化・文明に関する研究ということで、広く古代から現代に及び、アーリア人進出以前からの住民とその末裔を含めた諸民族の伝統文化および近代以後の変容を扱い、研究対象も、文献や銘文のみでなく、口承伝説その他を含み、また方法的にも文献学のほか文化人類学、民族学、社会学、考古学、歴史学等等多彩な領域にまたがっているのだから、「古典学」という領域はかなり限定された一部分に過ぎないということになるであろう。しかし、学の成立、関心の出発点ということになれば、やはり、インドの文化伝統のなかで聖典などとして伝承されて来たサンスクリット系の諸文献について、十八世紀以降ヨーロッパ系の学者たちによって始められた学問体系としての「インド古典学」がその出発点であり中核であったといえよう。

これは当のインドの地において、当の古典に対する学の伝統がなかったということではない。インド文明そのものでも言うべき、その学の伝統の存在をヨーロッパ人が発見し、外部から自分たちの方法にしたがって研究しはじめたもの、それが今日いうインド学あるいはインド古典学の源流だということである。

では、どうしてそれが起こったかといえば、ヨーロッパ人によるインドの発見（1498）があり、ヨーロッパ人のインド文化への直接の接触があり、さらに、その侵略、植民地化という政治的、武力的、経済的な動きがあった。その間にはムガル朝の王子ダーラシコーによるウパニシャッドのペルシャ語訳（『ウブネカット』と呼ばれた）と、それが18世紀末にフランス人デュペロンによってラテン語訳されるという二次的翻訳によるインド古典の紹介もあったが、何よりヨーロッパ人が大きな関心をもち、研究を強力におし進めるようになったきっかけは、そのインドの古典語サンスクリット語がヨーロッパ人自身も古典として尊重しているギリシャ・ラテン語と何と親類筋の言葉であるということの発見にあった。ペルシャ戦争やアレキサンダー大王の遠征以来、東方の異民族と思っていたペルシャ人やインド人たちが自分たちと似た言葉を使うことの発見から来る親近感がかれらには大きかったにちがいない。それが18世紀末から19世紀にかけてのロマン主義の風潮を呼び起こし、後者がまたひるがえってインド学の隆盛を引き起こしたと言えそうである。その点でインド学の場合は、他の文化伝統、イス

ラムや中国の場合とはやや異なった状況にあるのではないと思われる。そして事実、インド学の発展は、そのインドとヨーロッパの共通な語族の言葉の研究を目的とする印欧語比較文法、比較言語学の発達と時を揃え、さらには西洋古典学も比較文法の成果を俟って、文献学、言語学としての完成を見るに至ったのである。その点インド学は、近代文献学の発想はヨーロッパに由来するとはいえ、実際の文献研究においては、全てが西洋古典学の後追いということではなく、互いに影響しあって発達した面も多かったと言えよう。これはあるいみではインド学の、他の東洋諸地域の古典学とは異なった、特殊な条件といってよいかもしれない。

以下、印欧語比較文法の発達も視野に入れながら、インド古典学の初期のころのすがたを概観してみたい。材料としてヴィンテルニッツの『インド文献史』（上巻、序章）を利用させていただく。

（Moritz Winternitz, *Geschichte der indischen Literatur*, Leipzig, 1908; revised English ed. tr. by Mrs. S. Ketkar, Calcutta, 1927; 和訳：中野義照訳、ヴェーダの文学　インド文献史、第一巻、1964 .）

インド古典学の黎明期

2000年以上古い時代からの伝承が連綿と後継者によって伝えられている文明といえば、その質と量においてインドは中国の漢文文献とならぶ世界の雄であろう。ギリシャもビザンティン文化、ギリシャ正教を通じてその伝承が伝えられたが、西欧がその直系の伝承者とはいえない面がある。キリスト教にとってギリシャ文化は異教であったからである。その点インドと中国は、共に正統の伝承者が存続した点で幸運であった。しかしインドは中国と違って、文献の形でその伝承を書き残すという点では、分野によってはあまり忠実ではなかった。とくに聖典の場合、口承、誦唱による継承が重んぜられていた。それが社会的に伝承者を限定し（聖職者パラモン階級）、広く民衆の間での普及を妨げ、秘伝を生む傾向を伴った。その象徴的な事柄として、ヴェーダ聖典が14世紀に至るまで文字に写されず、その時サーヤナによる注釈ができてはじめて文字化されたということがある。しかしヴェーダ聖典を除く領域では、文字化はかなり早くから行われていた。アショーカ王碑文の存在は、紀元前からの文字の流通を証明しているし、仏典も紀元前後から写経される伝統が始まっている。

ヴェーダ聖典は六支とよばれる付属文献を伴っているが、その範囲は韻律学、文法学、律法学、幾何・度

量工学，論理学から詩学，劇学，性愛学にまで及び，学の領域の広さという点ではギリシャ文明に匹敵する。その多くの領域において文献が写本と同時に口承によって正確に伝承されてきたが，大勢としてはバラモン階層を主とする限られた人々のものであって，庶民が文字を学ぶことは少ないという状態であった。

東洋におけるヨーロッパ人の渡来，そして民衆との接触はたいいていキリスト教宣教師の活躍によって始まっている。インドもその例にもれない。17世紀初頭，イギリス，オランダが東インド会社を設立してインド経営に乗り出したあと，宣教師たちは次第にその数を増した。かれらはインド人をキリスト教徒化するためには土着の風俗・習慣，ものの考え方，宗教を知る必要があるとして，積極的にインドの伝承の発掘に努め，民衆の伝える民話，神話などを通じて，大もとの古典の研究へとすすんでいった。宣教師たちはその知りえたところをヨーロッパの故国に紹介する。こうして1650年以降，オランダのアブラハム・ロジャーやヨハン・エルンスト・ハンクスレーデンなどの先駆者が現れた。後者は1699年はいじめてサンスクリット文典を著した。

しかし，組織的なサンスクリット古典研究を鼓舞した人としては，18世紀半ばベンガル総督の地位にあったウォーレン・ヘースティングスがおり，その許でチャールズ・ウィルキンスが『ギーター』をはじめ，『ヒトパデーシャ』（寓話）『シャクンタラー』（戯曲）など代表的なサンスクリット文献を英訳したのが，サンスクリット文献の直接にヨーロッパ語へ翻訳された始まりとして特記される。その同じ動きの中で，ウィリアム・ジョーンズが1784年ベンガル・アジア協会をカルカッタに設立したのは，その後のインド古典学発展のメルクマールとして大変重要な出来事となった。

ジョーンズは自ら『シャクンタラー』のほか『マヌ法典』の訳を出してインド法典学をヨーロッパに紹介した。インド法典類は単なる古典というより，インド統治の現場においても参照される重要な生きた文献として研究され，ヨーロッパの法学にも影響を与えている。ジョーンズはまた，サンスクリット語とギリシャ・ラテン語との間に関係のあることを学問的に確定し，加えて，ドイツ語，ケルト語，ペルシャ語などの間の関係も検討して，印欧語比較文法のはしりとなった。ジョーンズの報告，研究はヨーロッパの古典文献学者たちの間に大きな反響をよび，やがてシュレーゲル兄弟等の活躍を惹きおこすに至る。

インド文献学を主な任務とする学者たちとしては，ヘンリー・トマス・コールブルク

（インド言語学と考古学の創始者）

アレキサンダー・ハミルトン

（シュレーゲル兄弟にサンスクリットを教えた）

フランツ・ボッグ

（比較言語学を創始。『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』の原典研究，サンスクリット語文典）
そして

ヴィルヘルム・フォン・フォンボルト

の名を挙げるのが出来よう。

インド古典学の確立期（1830 - 1900）

インドの古典中の古典『ヴェーダ』聖典の研究はようやく1830年頃からはじまる。その研究開始がおくれたのは，秘伝として部外への情報が限られていたことによるところが多いが，ヨーロッパ人が多く接した南インドのバラモンたちの知識の乏しさにもよるといわれる。ともあれフリードリッヒ・ローゼンの『リグ・ヴェーダ讃歌』の部分訳（1830）にはじまりアルプレヒト・ヴェーバー（『ヤジュル・ヴェーダ』研究），ルドルフ・ロート等の研究により，19世紀中葉に漸く本格的となり，つづいて後半にほぼ基本的な研究が完成した。その最大のメルクマールは，マクス・ミュラーによる『リグ・ヴェーダ』の原典出版（1890 - 92）に指を屈さなければならない。この間，ロートとその弟子たちのチュービンゲン学派がヴェーダ研究を牛耳ったが，その後フランスのベルゲーニユ，またピツシエルやゲルトナーによる批判的研究が出て，20世紀にひきつがれていった。

『ヴェーダ聖典』の内容に関しては，ミュラーは比較神話学の立場から解釈したが，その後，本文に即した理解が大切とされ，オルデンベルグやヒルレブランドの解釈が高い評価を承けている。

1830年代に新たに起こった研究分野としてもうひとつ仏教（およびジャイナ教）がある。これはネパールにおける大乘仏典（仏典サンスクリット）とセイロン（スリランカ）におけるパーリ語聖典の「発見」によるもので，ミュラーやオルデンベルグなどヴェーダ学者が同時にサンスクリットの言語学的研究への関心から仏典資料に関心をもったことによる。つまりヴェーダ文献とは異なったブラークリット（俗語）文献としてのパーリ聖典やジャイナ聖典，またヴェーダ以後の古典サンスクリットに属する『プラーナ』や叙事詩などに連なる文献としての仏教梵語ということで，これらの資料から，サンスクリット以外のインド諸語の研究が急速に発達した。

さらに仏教への関心は、その文献の示すところに従って、インド古代史の時間的配列にも示唆を与えるところがあり、アショーカ王碑文（インド最古の文字資料）その他の碑文研究をおこし、さらに仏教の伝播のあとを追ってのアフガンから中央アジアにいたる諸地域の古代資料の発掘、そして中国との接点、漢訳仏典とインド資料の比較、またコータン語等のイラン系の言語の研究、さらにはトカラ（トハラ）（大夏）族の言語資料の発見によるトカラ語の印欧語での位置付けなどインド・ヨーロッパ語系統の豊富な資料をもたらし、比較言語学の発達に大いに貢献するところがあった。（ヒッタイト語の発見も同じころ。）

このようにして19世紀末から20世紀初めにかけて、今日みられるインド学のほぼ全領域にわたって、その古典研究の枠組みの大成を見た。その間、『リグ・ヴェーダ辞典』などの公刊、ヴェーダを中核とするサンスクリット語辞典の完成（ベートリンクとロートによる）、A.ヴェーバーのインド文献史、アウフレヒトの写本目録などが著された。またG.ビューラーはそれまでになされたインド学上の貢献をグルンドリスの叢書として出版する企画をたてた。一方、リス・デーヴィッツはパーリ聖典協会を設立して、パーリ聖典の写本の集成、校訂出版、翻訳などの仕事を開始した。大乘仏典に関しては個別的に研究が進められたが、その際、チベット訳仏典の研究が梵語原典の校訂出版に大きな力となった。

印欧語とアーリヤ系優越説

以上、18世紀後半にはじまるインド学、すなわち近代インド古典学の流れを大雑把に19世紀末にいたるまで辿ったが、ひとつ気付くことは、それがインド・アーリヤ語系の資料に限られていることである。インドの言語としては、そのほかドラヴィダ系、ムンダ系の言語があり、とくに前者は西紀前後から文献をもっているが、その研究はようやく19世紀後半にはじまった。研究の活発化は20世紀後半のインド独立後を俟たなければならなかった。そこには欧米の学者たちの印欧語への親近性がはたらくとともに、19世紀初頭からのインド人の古代文化への覚醒に伴うアーリヤ文化礼賛の動きがあった。代表として、1833年、カルカッタにブラフマ・サマージをひらいたラーム・モーハン・ローイの啓蒙運動が挙げられる。この動きはやがてアーリヤ・サマージの過激な政治運動をひきおこし、19世紀後半のナショナリズム運動に引き継がれていく。その最終の形として、20世紀初頭から1920年の死に至るま

でインド国民会議派の一方の旗がしらをつとめたティラクの主張を挙げる事が出来る。かれは独自のヴェーダ研究と天文学に基づいてアーリヤ民族北極地方起源説（B.C. 4000ごろ）を唱えた。

この過激な民族主義はガンディーによるより開かれた民族主義によって克服されたが、独立後もなお対パキスタンの民族主義の主張の中にくずびついている。しかし、独立後の言語州の形成は、地方民族文化の研究を助長することとなり、ドラヴィダ系諸言語と文化の研究の飛躍的な発展をもたらした。（あわせてヒンディーその他の近代インド諸語文献の研究も、主にインド人みずからの手で）

近代インド古典学へのインド人の貢献

近代インド古典学の形成、展開に伴う第二の問題として、その伝統の当事者であるインド人はどのような貢献を果たしたかという問題がある。

日本のインド学は明治9年（1876）南條、笠原両師がマクス・ミュラーの許に派遣されて学んだのを嚆矢として、爾来、高楠、渡辺海旭その他と相継ぎ、近代的古典文献学をマスターして仏教学の解明につくすなど、ヨーロッパ人以外としては恐らく一番早く反応を示した民族と思われる。もっとも仏教徒という意味ではインドの文化伝統の一部の保持者であるから当然の反応とも言えるのであるが。ともあれ、スタインやペリオの探険につづく大谷探険隊の中央アジア派遣とか、河口慧海のチベット入国とかが20世紀初頭前後に行われ、文献上の業績も現れている。このことは誇りをもって謳ってもよいと思う。しかし、その業績はほとんど仏教およびその周辺に限られており、戦前（20世紀前半）に純インド学の領域で欧米に比すべき業績のこしたものは、ほとんど辻直一郎ひとりにとどまる。

これに対し、インド学におけるインド人の業績は如何。インド人がサンスクリットを読むのは日本人が漢文文献を読むに等しく、ヨーロッパ人がギリシャ・ラテンを教養とするに等しいであろう。しかし、ヴェーダ聖典を伝えたバラモンは自ら近代の文献学に手を染めることなく、インド人によるインド学は、むしろ世俗的文献や民衆宗教文献としての叙事詩やプラナーから始まっている。しかし、その成果に関しては厳密な批判性を欠くという評価もしばしばあった。

そうした状況の中で、パンディット（伝統的サンスクリット学者）による初期の代表的成果として、

サティアヴラタ・サーマーシュラミによる注釈付き『サーマ・ヴェーダ・サンヒター』の出版（1871 - 8）

シャンカル・バンドゥラン・パンディットによる注釈付き『アタルヴァ・ヴェーダ』の出版（1895 - 98）を挙げることができる。（『辻直四郎著作集』第1巻，p 281，n .10）

インド学草創期の学者，教育者として筆頭に指を屈すべきはラマクリシュナ・ゴーパル・バンドルカルであり，また梵英辞典の編者，V.S.アプテの名も逸することはできない，

20世紀にはいるとともに，インドの諸大学で学んだバラモンその他の教養人の中から文献学の方法論に通じた研究者が次第に現れ，写本の出版もインド各地で数多く現れるようになる。それらの業績は，カルカッタのピブリオテカ・インディカ（Bibliotheka Indica）をはじめ，マドラス，ボンベイその他の大学関係の叢書に収められている。

そのすべてに触れるのは筆者の力をこえるので，関係の深い仏教学の領域に限ってみれば，初期の碩学に大乘仏典研究のラージェンドラ・ラル・ミトラとハラ・プラサード・シャストリ，チベット探険のサラト・チャンドラ・ダース等があり，20世紀前半の活躍者として，インド論理学のサティス・チャンドラ・ヴィドヤブーシャン，パーリ仏教のダルマーナンダ・コーサンビー，初期仏教史や碑文研究でC.V.ラジュワデーやB.M.バルア等の名を挙げることができる。

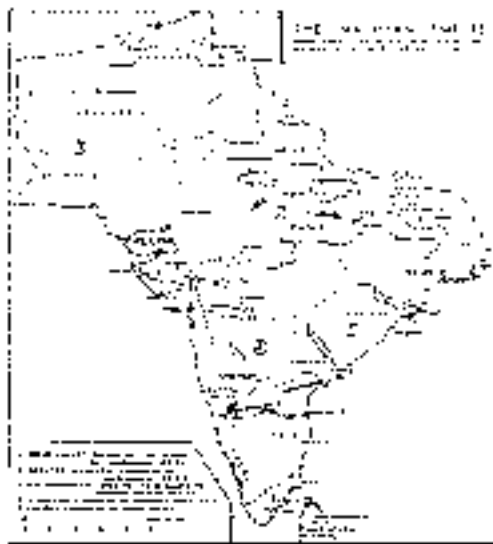
独立後のインド学界でインド人学者の活躍がさらに増していることは言を俟たない。

最後にインド人学者による最大の貢献として、『マ

ハーバーラタ』の校訂出版について触れておこう。

ヴェーダ聖典やその補助学のテキストが，極めて厳密な師弟間の口承によって伝わり，近代に至るまで驚くべきほど変容なしに伝承されて来たのに対し、『マハーバーラタ』は，半ば民衆的な宗教伝承として，時に応じて伝承者が恣意的にテキストの増広を行って来たと言われていれる。同時にヴェーダ聖典に先立って写本としての保存がはじまっている。こうした性格から，写本の系統は極めて多種で写本の数もインド中に非常に多い。それらを可能な限り集め，系統にしたがって分類しながら，校訂版を作るという難事業が1917年に設立されたバンドルカル東洋研究所の事業として1925年に開始された。（この事業はそれ以前，ヨーロッパでも一度計画されたが，第一次世界大戦のため中断，その後沙汰済みとなった。）

総エディターに任命されたV.S.スクタンカルは，その第一巻の序文（Prolegomena, 1933）において，南北両系の写本の系統と分類根拠を説明し，各写本の特色を述べ，校訂の方針について述べている。そこには方法論として極めて完璧なインド古典文献学の典型的な成果が示されている。これはインド人学者による戦前最高の業績，貢献といってよいであろう。スクタンカルは完成途上，1943年に亡くなったが，そのあとはS.K.ベルヴァルカル，P.L.ヴァイドヤに継承され，1959年，全18巻の完結をみた。さらに1972年には付録とも言うべきハリヴァンシャ（ならびに索引類）の刊行をみ，事業は完成した。（バンドルカル研究所の分冊で計30巻。）



[参考資料]

西洋古典学	ヨーロッパ文化	インド古典文献学
聖書文献学	1453 コンスタンチノーブル陥落	(14世紀, ヴェーダ文献書写)
ギリシャ古典の再認識 (人文主義キリスト教とは別のヨーロッパ文明の淵源)	1492 コロンブス, アメリカ発見	
	1498 ヴァスコダガマ, インド到着	
	1517 ルター宗教改革	1526 ムガル帝国成立
	1600 イギリス東インド会社	アウランゼーブ (1618 - 1707)
	1602 オランダ東インド会社	17世紀中葉, ダーラーシコー
	1616 ガリレイ宗教裁判	ウブネカッタ (ウパニシャッドの ベルシャ語訳)
	1637 デカルト方法序説	1651 Abraham Roger (Dutch)
	1687 ニュートン万有引力	1699 Johan Erunst Hanxleden, サンスクリット文典
	1781 カント純粹理性批判	Warren Hastings (1732 - 1818)
Friedrich August Wolf (1759 - 1824) 古典文献学創始	1789 フランス革命 (18世紀後半 ~) 新人文主義	1784 William Johns (1746 - 94) アジア 協会設立 Charles Wilkins (1750 - 1836) ギーター等翻訳
1795 ホメロス研究序説		1801 - 2 A. Duperron ウブネカッタ伝訳
1812 ベルリン大学教授	ゲーテ ロマン派 (シュレーゲル兄弟等)	Henry Thomas Colebrooke (1765 - 1837) インド言語学, 考古学創始 Alexander Hamilton A. L. Chezy A. W. v. Schlegel Franz Bopp (1791 - 1867) 比較言語学創始 Karl Wilhelm v. Humbolt (1767 - 1835)
Alexander Wilhelm von Schlegel (1767 - 1845) 言語学		
Friedrich Schlegel (1772 - 1829)		
August Boeckh (1785 - 1867)		
1877 Enzyklopaedie u. Methodologie der philologischer Wissenschaften		

西洋古典学・比較言語学

Friedrich Nietzsche (1844 - 1900)

1869 バーゼル大学教授

1871 トロイア発掘

Wilamovits=Melloendorff, U. v .
(1848 - 1931) 古典古代学

1893 トカラ語資料発見

1906 ヒッタイト語資料発見

インド古典文献学

1830年代 ヴェーダ研究はじまる
(1828 Brahma Samāj)
Ram Mohan Roy (1772 - 1833)
インド人によるインド古典紹介はじまり

1838 Friedlich Rosen リグヴェーダ部分訳
Eugène Burnouf (1801 - 52) 大乘仏教研究
1826 パーリ語研究 1852 法華経フランス語訳
Christian Lassen (1800 - 76)
Rudolf Roth (1821 - 93)
Friedrich Max Müller (1823 - 1900)

1849 - 75 Rg-Veda 原典出版
(1876 南条・笠原留学)
Theodor Aufrecht (1822 - 1907)
Otto Böthlingk (1815 - 1904)
1852 - 75 サンスクリット大辞典, 7巻
Albrecht Friedlich Weber (1825 - 1901)
Georg Büller (1837 - 98) Grundriss
Thomas William Rhys Davids (1843 - 1922)

1882 Pali Text Society

1901 東京大学梵語学講座開設

インド人学者の業績

Satyavrata Sāmāsrāmi
1871 - 78 Sāma Veda Samhitā
Shankar Pundurang Pandit
1895 - 98 Atharva Veda (Text & Comm .)

Ramakrishna Gopal Bhandarkar (1837 - 1925)
1877 Wilson Philological Lectures on Sanskrit and the derived
languages
Vaman Shivaram Apte (1858 - 92)
1890 Practical Sanskrit English Dictionary

仏教研究

Rajendra Lal Mitra (1824 - 91)
Hara Prasad Shastri (1853 - 1931)
Sarat Chandra Das
Satis Chandra Vidyabhusan
Dharamanda Kosambi (1871 - 1947)
B. M. Barua

マハーバーラタの校訂

V. S. Sukthankar (1885 - 1942)
1933 The Mahābhārata, critical edition, vol. 1
S. K. Belvalkar (1881 - 1967)
1959 Mbh 18 parvans 出版完了
P. L. Vaidya (1891 - 1978)
1969 - 71 Harivaṃsa,
67 - 72 Indices (BORI Ed. 30 vols in total)